

国立国会図書館 調査及び立法考査局

Research and Legislative Reference Bureau
National Diet Library

論題 Title	コロナ時代のソーシャルメディアの倫理
他言語論題 Title in other language	Ethics of Social Media in the Era of Coronavirus
著者 / 所属 Author(s)	久木田 水生 (KUKITA Minao) / 名古屋大学大学院情報学 研究科准教授
書名 Title of Book	コロナ時代のソーシャルメディアの動向と課題 科学技術 に関する調査プロジェクト報告書 (Trends and Issues of Social Media in the Era of Coronavirus)
シリーズ Series	調査資料 2020-4 (Research Materials 2020-4)
編集 Editor	国立国会図書館 調査及び立法考査局
発行 Publisher	国立国会図書館
刊行日 Issue Date	2021-03-25
ページ Pages	—
ISBN	978-4-87582-875-4
本文の言語 Language	日本語 (Japanese)
摘要 Abstract	—

- * この記事は、調査及び立法考査局内において、国政審議に係る有用性、記述の中立性、客観性及び正確性、論旨の明晰（めいせき）性等の観点からの審査を経たものです。
- * 本文中の意見にわたる部分は、筆者の個人的見解です。

コロナ時代のソーシャルメディアの倫理

久木田水生

2020年11月12日

名古屋大学情報学研究科

1

スライド 1

概要

ソーシャル・メディアの発展は私たちのコミュニケーションの仕方に深甚な影響を与えている。新型コロナウイルスの流行はさらにその変化に拍車をかけるだろう。

しかしそこには深刻な懸念も存在している。

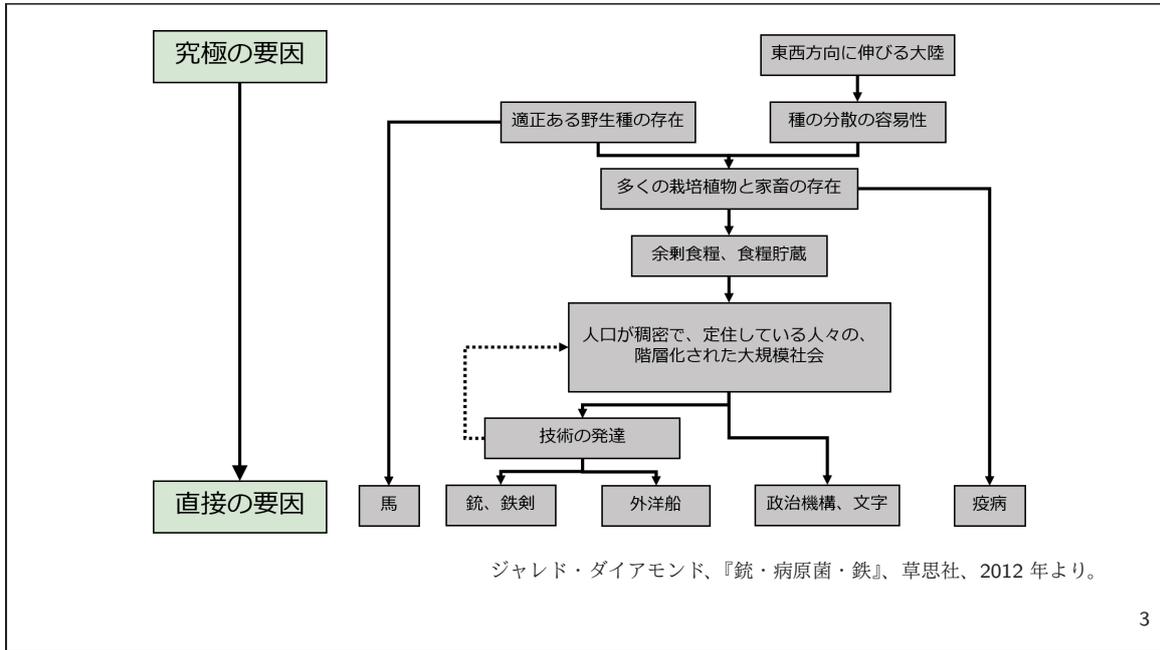
フェイクニュース、炎上、ヘイト、個人データの濫用などなど、情報技術の非倫理的な利用に加え、新しい情報技術はコミュニケーションの仕方を変化させ、それによって人間関係を劣化させるという懸念もある。

コミュニケーションは人間関係の基盤であり、それゆえ社会の基盤である。

新しい情報技術はコミュニケーションをどう変化させているのか、新型コロナウイルスの流行はそれにどのような影響をもたらすのか、コミュニケーションの未来はどうあるべきなのか、そこにどんな倫理的な懸念があるのか、いかなる対策が必要なのかといった問題を考えなければいけない。

2

スライド 2



スライド 3

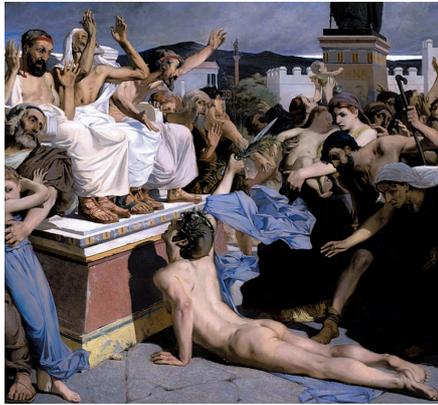
コミュニケーションと感染症

コミュニケーションは文明発展の鍵。
 ただしコミュニケーションが盛んな環境は感染症が広がりやすい環境でもある。
 ジャレド・ダイヤモンドはユーラシア大陸で最も早く高度な科学技術や統治体制が発達したのは、多くの文明が活発に交流を行ない、技術や知識を交換し合っていたからだ、と論じる。
 しかしそのためにユーラシア大陸は慢性的に感染症を抱え、そして頻繁に破滅的な流行に襲われてた。

地図は Виктор В - File:Outline map of Middle East.svg ETOPO1, CC 表示-継承 2.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=11738416> による

スライド 4

情報技術の役割



マラ톤の戦いの勝利を報告するフェイディピデース

情報技術の発展は文明の発展と感染症の抑制のトレードオフの関係を変化させる。新しいコミュニケーション手段、それを支える通信インフラ、情報を保存する媒体の進歩によって、私たちは直接的なコンタクトなしに膨大な情報をやり取りすることができるようになっている。

5

スライド 5

コミュニケーション ≠ 情報通信

コミュニケーションは二つの大きく異なる目的を持つ。

- 有用な情報を共有、伝達する。
- 社会的関係を構築、維持する。

後者の目的のコミュニケーションは、それ自体が快の源泉であり、またそれが欠けると人は不安やストレスを感じる。

ジョン・T. カシオポ、ウィリアム・パトリック著、柴田裕之訳『孤独の科学 人はなぜ寂しくなるのか』、河出書房新社 2010 年（原著：Cacioppo, John T, Patrick, William, Loneliness: human nature and the need for social connection, New York: Norton, 2009.）



6

スライド 6

「安全な世界をお楽しみください」

映画『サロゲート』では、人間は自分の身代わりロボット（サロゲート）を操作し、生身で外出することはほとんど無くなっている。

そのために交通事故や殺人事件、感染症などのリスクは激減している。また人々は自分の好む容姿を選ぶことができる（ブルース・ウィリスのサロゲートも実物より若い）。

サロゲートの広告のキャッチフレーズは「安全な世界をお楽しみください」というものである。

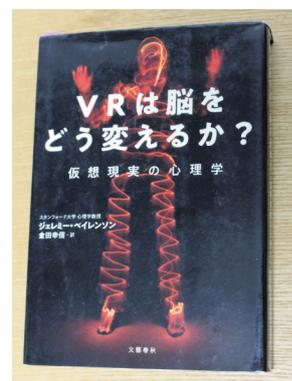
7

スライド 7

本当に安全か？

ジェレミー・ベイレンソン、『VRは脳をどう変えるか？——仮想現実の心理学』

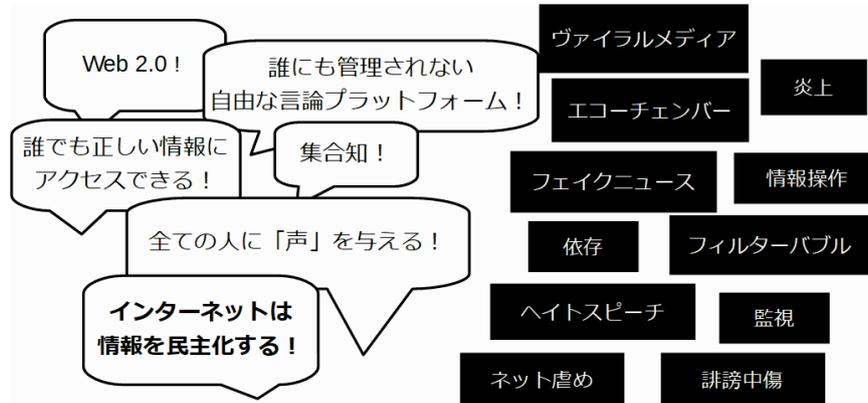
「メディア利用の歴史の中で、さらに言えば社会科学の研究ツールとしても、没入型VRほど人間の動作を正確に、高頻度で、こっそりと計測できる道具は存在したことがない。……口に出す言葉と違い、非言語行動は無意識に行われる。その人の精神状態、感情、自己認識をダイレクトに映し出す鏡なのだ。誰でも自分が口に出す言葉には注意を払える。だが、自分のちょっとした動きやジェスチャーを常にコントロールできる人はきわめて少ない」(p. 317)



8

スライド 8

インターネットの理想と現実



9

スライド 9

ティム・バーナーズ＝リーからの提言

「ウェブの父」、ティム・バーナーズ＝リーは World Wide Web の誕生 25 周年に当たる 2014 年に、ウェブの未来について、次のような懸念を表明した。

権力を濫用する政府、オープンな市場を崩そうとする企業、さまざまな犯罪行為がウェブの未来を脅かしている。……そのなかでもわたしが最も心配するのは、**市民に対する監視活動**、特に米国や英国の諜報機関が行ったとされる、民間の暗号を解読し、個人の活動を監視するような行為だ。

10

スライド 10

ティム・バーナーズ＝リーからの提言

続けてバーナーズ＝リーはこれからのウェブにとって重視すべき四つの目標を掲げる。

- 目標 1：非中央集権化
- 目標 2：オープンネス
- 目標 3：インクルージョン
- 目標 4：プライバシー、表現の自由、セキュリティ

「26 年目以降のウェブに必要なもの：「WWW の生みの親」から 4 つのヒント」、*Wired*、2015 年 1 月 11 日、
<https://wired.jp/2015/01/11/tim-berners-lee-future-of-web/>

11

スライド 11

ティム・バーナーズ＝リーの嘆き

それから 5 年後の 2019 年、バーナーズ＝リーのトーンはより悲観的になっている。

ウェブは機会を作り出し、周辺に追いやられた人々に声を与え、日々の生活を容易にしてきたが、一方でそれはまた詐欺師にも機会を与え、憎悪を拡散する人々にも声を与え、あらゆる種類の犯罪を容易にしてきた。

ウェブがいかに濫用されているかに関する最近の話を聞けば、多くの人々が、ウェブは本当によきものをもたらす力になるのか、と危惧し不安になるのも無理はない。しかしウェブが過去 30 年にどれだけ変わってきたかを考えるなら、私たちが今日知っているウェブが次の 30 年間でより良い方向に変化しないと考えることは敗北主義であり想像力の貧困だ。いまより良いウェブの構築を諦めるならば、ウェブが私たちの期待を裏切ったのではなく、私たちがウェブの期待を裏切ったことになるだろう。

12

スライド 12

ティム・バーナーズ＝リーの嘆き

バーナーズ＝リーによれば、ウェブの機能不全の主な要因は次の三つである。

- 意図的な悪意：国家が主導するハッキングやオンラインでの犯罪行為、ハラスメントなど。
- ユーザーの価値を犠牲にするゆがんだインセンティブを与えるシステムデザイン：広告ベースのビジネスモデルなど。
- 悪意のないデザインの意図しない負の帰結：二極化や炎上、オンラインでの議論の質など。

Tim Berners-Lee, "The World Wide Web Turns 30. Where Does It Go From Here?",
https://www.wired.com/story/tim-berners-lee-world-wide-web-anniversary/

13

スライド 13

インターネットの原罪

メディア研究者のイーサン・ザッカーマンは、**無料でサービスを提供する代わりに広告を提示するビジネスモデル**がインターネットの「原罪」だった、と振り返る。

より効果的に広告を提示するために、プラットフォーム企業はユーザーの個人データやインターネット上の活動の記録を貪欲に収集するようになった。



Ethan Zuckerman, "The Internet's original sin: It's not too late to ditch the ad-based business model and build a better web", *The Atlantic*, Aug 14, 2014.

14

スライド 14

インターネットの原罪

収集したデータは機械学習システムに供給され、ユーザーのプロファイリング、行動予測に利用される。

このようにして私たちはオンラインでの（そしてますます多くのオフラインでの）行動データからプロファイリング、行動予測されて、個人個人にカスタマイズされた広告とコンテンツを受け取る。

15

スライド 15

監視と行動変容

さらに適切なタイミングで情報を与えることで人々の行動を変容させることすらできる。

このような手法はオンライン・マーケティングを超えて、選挙や紛争にも組織的に利用されている。

Cf. Zuboff, *The Age of Surveillance Capitalism*; P・W・シンガー、エマーソン・T・ブルッキング、『「いいね！」戦争——兵器化するソーシャルメディア』；ブリタニー・カイザー、『告発 フェイスブックを揺るがした巨大スキャンダル』；ジェイミー・バートレット、『操られる民主主義——デジタル・テクノロジーはいかにして社会を破壊するか』；一田和樹、『フェイクニュース——新しい戦略的戦争兵器』

16

スライド 16

人工知能が得意なこと

ウェブ上での推薦、フィルタリングなどで使われる人工知能は、**私たちの願望や不安を学習して、それらをますます増幅させる**ようなコンテンツを提供する。

だから私たちはそこに釘付けになる。

そして私たちがそこに釘付けになったという事実が、そのコンテンツを提供した人工知能の判断が正しかったことの証拠である。

なぜなら**人工知能の目的は何よりも私たちをアプリに繋ぎ止めておくこと**だからだ。

17

スライド 17

人工知能が得意なこと

私たちの中のプリミティブな部分は、異質なものを嫌悪し恐れ、同じ集団に属するものを特別に優遇したがる。

自分の信念を補強してくれるニュースを見たがり、自分の信念に反するニュースから目を背ける。

自分の道徳感情を逆なでする人々に怒りを燃やし、彼らが厳しい罰を受けることに快感を覚える。

世の中の不条理に耐えられず、そこに何かしらの分かりやすい説明があると思いたがる。

世界が複雑で曖昧であることを認めたがらず単純化して考える。

ソーシャル・メディア、ビッグデータ、人工知能の世界では、こういった人間のプリミティブな感情やバイアスに付け込むことができる人間が成功を収める。

18

スライド 18

近代的な価値との衝突

しかしそれは、近代以降、人間社会が築いてきた民主的な価値観と衝突する。

つまり、**民主主義的な価値観は多くの人間のプリミティブな感情を逆なです**ということだ。

世界市民主義も、リベラリズムも、ジェンダー間・人種間の平等も、天賦人權も、多様性も、寛容も、本来私たちの自然な情動にとって心地よいものではない。

民主主義はかなりの無理をしなければ維持していくことができない。

Cf. ジョナサン・ハイト、『社会はなぜ右と左に分かれるのか』

19

スライド 19

民主主義の危機

おそらく何もしなければ私たちが現在知っている（つもりだった？）民主主義社会は終焉を迎えるだろう。

それを防ぐための一つの方法は、個人個人のリテラシーを高めることだ。

結局のところ、私たちが質の低い情報にやすやすと踊らされなければそういった情報は駆逐されていくはずである。

しかしまたリテラシーとは何かということについて再考する必要もあるだろう。

従来のリテラシーの捉え方は、個人の知識や能力、態度といったことを重視する傾向がある。

しかしそのような個人の資質に頼るアプローチには限界がある。

20

スライド 20

価値の衝突をどうマネージするか

フェイクニュースなどの問題に対する有効な対策は別の民主主義的な価値、すなわち表現の自由や個人の自律性といった価値と衝突してしまうのかもしれない。

いずれにせよ私たちは非常に難しい局面に立たされている。

自律性、表現の自由、プライバシーなどなどについて、**技術と社会の発展を視野に入れながら、再び考え議論し、場合によっては修正していかなければならない。**

例えばこれまでと同じような「表現の自由」が、ますます現実の体験に近づくVRのコンテンツにも適用されるべきか？

21

スライド 21

パネリスト報告 5

コロナ時代のソーシャルメディアの倫理

名古屋大学大学院情報学研究科 准教授
久木田 水生

私は、「コロナ時代のソーシャルメディアの倫理」について話します。時間がないので飛ばし飛ばしで進めます。スライド2の「概要」は読み上げませんが、これまでに皆さまが話されていたような問題に取り組まなければならないということです。

今、コロナが流行していますが、疫病は人間の歴史において常に人間を苦しめてきました。スライド3は、ジャレド・ダイヤモンド (Jared Diamond) の『銃・病原菌・鉄』から取った図です。ユーラシア大陸の人々がアメリカ大陸に渡って、アメリカ大陸の人々をほとんど滅ぼしてしまいましたが、ユーラシア大陸の文明がアメリカの文明に勝った原因は何か。直接的な要因として幾つか挙げられていますが、その中に疫病があります。ユーラシア大陸には、アメリカ大陸には存在しなかった多くの病気に加え、多くの技術、発達した文明がありました。これらによってアメリカ大陸の文明を滅ぼすことができたのです。

感染症の発達と文明の発達との間には深い関係があり、どちらもコミュニケーションが重要な役割を果たします (スライド4)。例えば、馬車という新しいイノベーションが生まれるためには、当然、馬が必要で、車輪も必要です。車輪はメソポタミアで発明され、ウマはカスピ海の辺りで家畜化されました。この2つの地域の間にはコミュニケーションが存在したおかげで、両者が結び付き馬車という新しいイノベーションが生まれたわけです。

異なる場所で生まれたアイデアや産品が結びついてイノベーションが起きるということは、それと同時にこちらにあった感染症がこちらにも移り、変異し、更に広がっていくことを意味します。感染症を引き起こす菌やウイルスが伝播したり、新しく変異したりするように、アイデアや知識は人を介して伝播・発展します。文明の発達と感染症は、切っても切れない関係にあります。しかし、情報技術が発達してくると、情報の伝達と感染症の伝播を切り離すことができるようになります (スライド5)。昔は情報を伝えるために、人間が物理的に移動しなければなりませんでした。情報技術を活用すれば人間が移動しなくても情報だけを伝えることができます。そうすると感染症に感染するリスクを冒さずに、アイデアを交換して、イノベーションを起こせるようになります。

ただし、コミュニケーションの役割は、1つだけではありません。有用な情報を共有したり伝達したりするほかに、社会的関係を構築・維持するという役割もあります (スライド6)。これができないことの辛さを、現在我々は痛感しています。

『サロゲート』(Surrogates, 2009) は、示唆に富む面白い映画です (スライド7)。映画では、人々は家の外に出ないで、自分の身代わりになるロボット (サロゲート) を遠隔操作して人とほとんど接触しません。外に出ないので事故や事件に巻き込まれることもなく、病気もうつりません。しかも、自分の容姿を選ぶことができます。これは主人公のブルース・ウィリスのサロゲートですが、本物より少し若々しい感じがします。このサロゲートを製作している会社はコマー

シャルで「安全な世界をお楽しみください」と言っています。この映画と同様に、我々は、今後コミュニケーションをどんどんバーチャルなものに変えていくだろうと思われれます。

そこで問いたいのは、それは本当に安全な世界なのか、言うほど安全なのかということです。そこには、いろいろナリスクもあります。VR（バーチャル・リアリティ）の研究者ジェレミー・ベイレンソン（Jeremy Bailenson）は、「没入型 VR ほど人間の動作を正確に、高頻度で、こっそりと計測できる道具は存在したことがない」と言っています（スライド8）。コミュニケーションがテクノロジーによって媒介されると、それだけテクノロジーに依存したり、テクノロジーに操作されたり、情報を収集されたりすることが多くなります。このようなリスクは、当然、存在します。

このことは、インターネットに対して我々が期待したことと、インターネットの現実とのギャップを考えると明らかだと思えます（スライド9）。インターネットが普及しだした当初は、素晴らしいものだ、自由な言論のプラットフォームだ、誰もが正しい情報にアクセスできる、全ての人が「声」を持つことができる、情報を民主化する、といったことが言われました。ところが、現実はそのようなことは全くありませんでした。インターネットにはヘイトスピーチやフェイクニュースが溢れかえり、そして人々はフィルターバブルに閉じ込められていき、政府による監視などが行われる。これがインターネットの現実です。

ワールド・ワイド・ウェブ（WWW）の仕組を考えた「ウェブの父」、ティム・バーナーズ＝リー（Tim Berners-Lee）は、WWWの誕生25周年にあたる2014年に、ウェブの未来について次のような懸念を表明しました（スライド10）。「権力を濫用する政府、オープンな市場を崩そうとする企業、さまざまな犯罪行為がウェブの未来を脅かしている。その中でも私が最も心配するのは、市民に対する監視活動」だと。

一方で、2014年にバーナーズ＝リーは、これからのウェブにとって重視すべき4つの目標を掲げていました（スライド11）。ところがその5年後、WWW生誕30周年になると、彼はより悲観的になり、「多くの人々がウェブは本当に良きものをもたらす力になるのかと危惧し不安になるのも無理はない」と語っています（スライド12）。それでもバーナーズ＝リーは、まだ頑張っただけからウェブを良いものにしていこうと言っています。彼はウェブの機能不全の主な要因を3つほど挙げていますが（スライド13）、詳細は割愛させていただきます。

また、メディア研究者のイーサン・ザッカーマン（Ethan Zuckerman）は、「インターネットの原罪」という記事の中で、「無料でサービスを提供する代わりに広告を提示するビジネスモデルがインターネットの『原罪』だった」と振り返っています（スライド14）。より適切な広告を提示するために、プラットフォーム企業は、ユーザーの個人データやインターネット上の活動の記録を貪欲に収集するようになりました。現在、収集したデータは機械学習システムに供給され、ユーザーのプロファイリング、行動予測に利用されています（スライド15）。平先生のお話でもありましたが、監視資本主義といって、ユーザーのデータやそれに基づいた行動予測が、大きな市場価値を持つようになっていきます。

行動を予測するだけでなく、適切なタイミングでこういう人に、このような情報を与えれば、こう行動するぞということ、行動を変容させたり、操作したりすることもできます（スライド16）。このような手法は、オンライン・マーケティングを越えて、選挙や紛争にも組織的に利用されていることは、よく聞くところです。

そこでは人工知能が大活躍しています（スライド17）。「アテンション・エコノミー」とい

う言葉もありますが、我々をできるだけ、あるウェブ上のサービスやコンテンツに釘付けにすること、いかにして人の関心をそこにとどめさせるかがビジネスを行う側には重要で、そのために人工知能が使われています。人工知能は、我々の願望とか不安を学習して、それを増殖させるようなコンテンツをうまい具合に我々に与えることができます。それによって、我々はついつい不安や願望に駆られて、そのコンテンツに釘付けになってしまいます。我々がそこに釘付けになったという事実が、その人工知能がうまく機能していることの証拠なのです。その人工知能の目的は、我々をあるアプリにつなぎ止めておくことにあるからです。

人工知能は、我々のプリミティブな感情、嗜好、欲望をかき立てることが非常に得意です（スライド18）。今のソーシャルメディア、ビッグデータ、人工知能の世界では人間のプリミティブな感情やバイアスにつけ込むことができる人間が成功するようになっています。

しかし、それは、近代以降、人間社会が築いてきた民主的な価値観と衝突します（スライド19）。民主主義的な価値観は、多くの人間のプリミティブな感情と相容れないところがあります。例えば、世界市民主義も、リベラリズムも、ジェンダー間・人種間の平等も、天賦人権も、多様性も、寛容も、本来、我々の自然な情動にとっては余り居心地の良いものではありません。結局、民主主義は、かなり頑張っても無理しなければ維持していくことができないのです。

現在、民主主義はかなり難しい局面に立たされています（スライド20）。リテラシーが大事ということは誰でも知っていますが、うまく対処できるほどリテラシーを高めることができるかということ、私は限界を感じています。

となると、制度的に解決していかなければならないのですが、制度による解決は、やはり表現の自由、自律性といった価値と衝突していくと思われれます（スライド21）。表現の自由は、例えば、VRに関してそのまま認められていいのかどうかといったことを、これからは技術と社会のことを個別に、具体的に考え、場合によってはこれまでの価値観を少し修正したりしなければならぬのだろうと私は考えています。